

私と石川県小児保健協会

渡部 礼二

この文は小児科医会会長としての原稿ではない事をまずお断りしておきます。この会に關して私の思い出話であります。大部昔のことになるので記憶が少し曖昧になっている事をお許し願いたい。

私が石川県立中央病院を辞して、開業したのは昭和63年秋で、翌年から近所の小学校の校医を任されました。学校医は初めての経験でありました。現在は中止されましたがこの頃はまだ結核のスクリーニングとして、学校保健法（現在は学校保健安全法）で小学校1年生にツベルクリン反応を実施していました。しかし学校にある個人個人の保健手帳には以前のBCG接種の記載する項目さえなかったのです。ツベルクリン反応の結果を判断するにはBCGの既往が必要だったのです。そこで私が校医をしている小学児童の全員からBCGの既往のアンケートを実施し、ツベルクリン反応の結果等をまとめて報告しました。それが平成2年の第2回石川県小児保健学会でした。その翌年から金沢市の児童の保健手帳にはBCGの既往が予防接種の項目欄に加えられました。また当時の発表は資料をB4の用紙に印刷しての配布であり、学会も土曜日の開催で自院の診療所を休診にしなければならず、開業医の参加しにくい学会でした。

ここで問題だったのは昭和33年から学校保健法でツベルクリンが小学校1年生に施行されていたにもかかわらず30年間もBCGの既往が不明のままその判断がなされていて、誰もそれを指摘せず、修正されていなかったことです。

このような事象は他にもありました。後日の平成21年に日本小児科学会雑誌に掲載できた（後述の月一会のメンバー蓮井正樹先生が筆頭執筆者）

インフルエンザ流行期の学級閉鎖の有効性についてです。学級閉鎖は昭和30年のアジア風邪流行の際に文部省局長通達で制度化されたにもかかわらず検索してもその有効性の統計学的報告はなく、それまで50年間もその有効性を検証されずに学級閉鎖がなされていたのです。

そして、21世紀（平成12年以後）に入ってその頃はまだ会員も少なかった県内小児科医のグループ「月一会」が普及し始めのインターネットを利用しメーリングリスト「キンダース」を会員以外の小児科医にも開放し、医療・感染症情報等を交換討論の場としていました。平成13年の麻疹流行をそのキンダースで察知し当初から関係部署へ働きかけをするも全県に拡散してしまいました。当時全国の小児科医を中心とした麻疹ゼロ運動もあり、平成14年6月の石川県小児科医会総会で麻疹撲滅運動の提案・承認され石川県小児科医会の麻疹撲滅プロジェクト「石川はしかゼロ作戦」が発足しました。委員会委員を小児科医会会員にとられず人選し、「麻疹発生“ゼロ”」を目標とし、①麻疹予防接種普及のための体制作り。②より機能的な麻疹サーベイランスの確立。③麻疹に関する情報提供および啓発活動。を目標に活動を開始しました。時を同じくして、全国に先駆けての麻疹迅速把握事業が石川県で初めて実施され、麻疹撲滅への機運はより一層高まりました。国の麻疹全数把握はその後遅れる事6年後の平成20年にやっと実施されました。

平成15年4月に県内高校剣道部合同合宿での麻疹流行が派生して金沢工業大学麻疹集団発生になりました。行政からも石川はしかゼロ作戦委員会からも大学に出向いて麻疹拡大防止のための助

言がなされ、大学は緊急の集団予防接種を決断しました。石川はしかゼロ作戦委員会員はもとより、地域の小児科医、金沢大学医学部小児科の協力を得て約6500人という大規模な集団予防接種がなされ、全国のマスコミにも取り上げられました。後日、詳細な疫学調査で多数の麻疹の二次性ワクチン効果不全が判明し、幾多の学会や学術雑誌で報告しました。その事が現在日本で実施されているワクチン2回接種の切欠となったと思っています。石川県小児科医会の一委員会である「石川はしか

ゼロ作戦委員会」のこれらの活動が日本小児保健協会の平成16年度「小児保健奨励賞」〔小児保健実践活動助成部門〕に選ばれ、表彰されました。

（詳細は平成17年度の「小児保健いしかわ」に私が執筆し報告）

これらが私とこの石川県小児保健協会との関わり合いであり、また個人あるいは組織がその活動を通して社会の制度さえも変革する種を蒔けたという事をこの会を通して実感でき、その事がその後の私の医師人生を変えたと思っています。